ますと、モウ、富は、濟んだ後で

「甚ふ早ふ濟んだな、當りは何うなつたか知らん、オヽ、書いて張つて有る、一番が、子の千三百六十五番、二番が、辰の八百五十七番、三番が、寅の五百四十八番か、宜い番號が出てゐるわい、違ひない、私も、旦さんに一枚買ふて貰ふたーる、もしも何れが當つても、半分はお前に遣ると、仰つた、私の買ふて貰ふたのが、子の千三百六十五番と、一番が子の千三百六十五番か、私のんが、子の千三百六十五、ほゝ、ほしたら、五番や、彼れが子の千三百六十五番で、私のんが、子の千三百六十五番やつたら、あたたゝゝゝ」

「モシあんた何ないにしなはつたんや」

「あたゝゝゝ」

「エ、當つたんだつか」

「あたゝゝゝゝゝ」

「當つた、當つたんやつたら、いんで、待つてなはれ、世話方が、金を持つて參ります」

「あたゝゝゝ、足が地につかんがな、あたゝゝゝ、彼の人は來た時から、福の神やと思ふた、何れが當つても、半分遣ると仰つしやつたよつて、半分貰へば五百兩、五百兩貰ふたら、大阪中の地所を買ふて、大阪一杯の宿屋を建て、其れは宜いが、手がひつゝいて、離れんが、是れを取つて貰ふ

のに、五百兩懸つたら、五百兩が、何もならん、あゝ取れた、あたゝゝゝゝ、嬉ー」

「マア嬉やない、何ないにしなはつたんや」

「あたゝゝゝゝ」

「コレ、しつかりしいや、何やね」

「だんだんささんは」

「旦さんは、今、御歸りになつて、なんや行つた先で、證文がどうとか、判がどうとかで、喧嘩まくで歸つて來たので、氣分が悪いと云ふて、二階で寢て御座る」

「寢て居るとこやない、寢てゐるとこやない」

「どないにしたんや」

「どうの、こうの、て、とゝゝ富が、あゝゝゝたゝゝゝんやが」

「なにあの富が、當つた、フハ……ア」

「是れ、腰を抜かして、何う、するね、旦さんは、お酒がお好きや、酒の燗をせい、德利ではあかん、風呂の湯を流して、風呂の中へ酒を入れて、下から、もやして、燗をせい、酒風呂へざふつと這入つて貰ふ寢て居るやなんて、ぢやら〳〵した」（トントントン）

「ヘイ旦さん」